

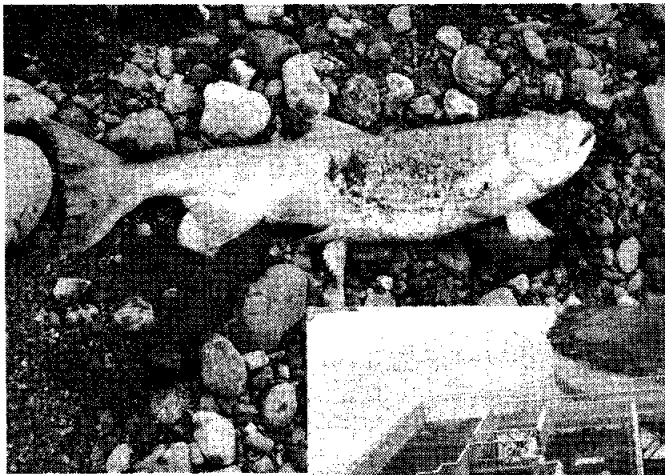
# NCS HOKKAIDO

Nature Conservation  
Society of Hokkaido

2007年 1 月 NO.132

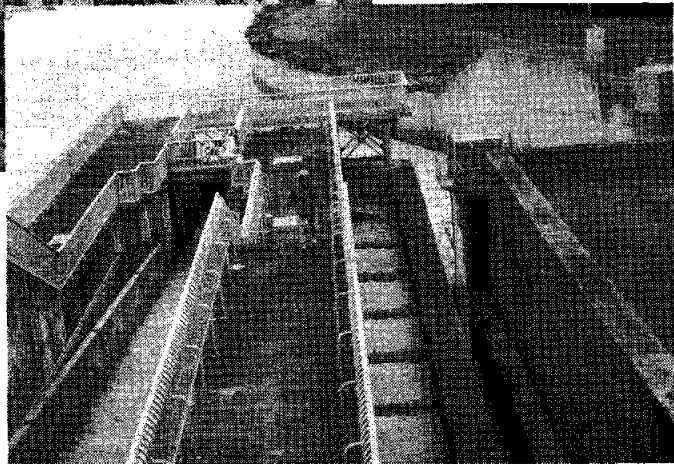
..... CONTENTS .....

チヨットひとこと.....久野 裕之..... 2	「06年支笏湖三話」.....中川 晃..... 7
「風力発電と環境問題」 .....高田 令子..... 3	沙流川の河川生態系とサケの無念さを思う .....奥谷 浩..... 8
北海道各地のニュース..... 4	2007年自然保護学校開催のご案内
サンルダム問題は玉虫色報告・闘いは 第二ラウンドへ.....佐々木克之..... 6	コラム(1).....在田 一則..... 9
	お知らせコーナー.....10



二風谷ダムの下流で産卵  
できずに死んだサケ  
(ホッチャレではない)

二風谷ダムの魚道



(撮影：奥谷 浩一)

## チョット\*ひとつ

### 泉(メモ)・川

明けましておめでとうございます。

初夢は、一富士、二鷹、三なすび、だそうですが、皆様いかがでしたか。

富士の裾野には三島という市がありまして、そこに「楽寿園」という庭園があります。溶岩の上に、匠の技と美を極めた「楽寿館」が建っています。

湧水期には、満々と水を湛え、それはすばらしい景色になったそうです。

確かにパンフレットの写真にはすばらしい景観が写っています。

こんな景色を私も見たいと思いました。

しかし、もう何年も水が貯まったことが無いと、地元の人が言っていました。

札幌にも、メモと呼ばれる泉がたくさんあったと聞いています。北大、偕楽園、知事公館、サッポロビール…市内に十数ヶ所あったそうです。

そして、そのすべてが涸れてしまっています。

そこに住んでいた生物は、また、その水を命の水としていた生物は、どこへ行ってしまったのでしょうか。豊かな水の風景は、今はもう見られません。

泉が涸れた主な原因は、地下水の過剰な汲み上げによることだと、容易に推察できます。

だとしたら、元に戻すことは、技術的には、そんなに難しいことではないのかもしれませんが、特に札幌では、工業用の割合は低いでしょうから。

ダムを無くしたり、直線化した川筋を元に戻すより簡単だとは思いませんか。

水辺で遊ぶ子供達の姿をイメージしてみてください。

僕らは、小川や池で遊んだ世代です。もう少し上の世代は、大きな川でも遊んだ世代です。今の子供達も川で魚を捕まえるときは、目の輝きが違います。

自然な水辺には植物が茂り、虫も魚も育ちます。人の心も育つのではないのでしょうか。これが私の見続けている夢です。

そういえば、昔、盛んに言われていた地盤沈下は、どうなったのでしょうか。

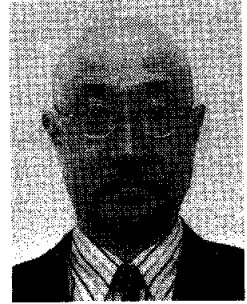
透水性の舗装が開発された話も聞いたのですが、どうなってしまったのでしょうか。

既得権の問題があるから、地下水の汲み上げ規制はできないのでしょうか。

水源の森が不法伐採された話も聞こえてきます。集材の為、大型重機で入りこみ、表土も植生も剥ぎとってしまう、まさに蹂躪の現場写真も見せられました。

地域でも地球でも空間は有限です。収奪・搾取を続けたら、いずれ滅びます。命や水の循環こそが無限の可能性を持っているのではないのでしょうか。

(当協会理事・札幌市在住)



久野裕之

## 「風力発電と環境問題」

ニムオロ自然研究会事務局長 高田 令子

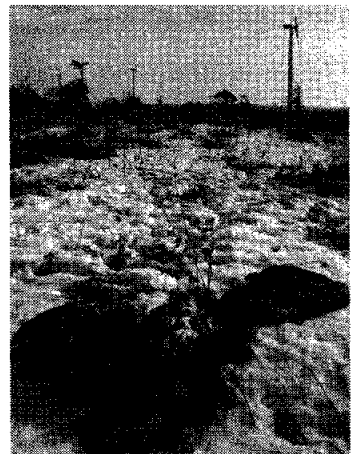
世界各国で地球温暖化による環境への影響が深刻化する中、風力発電への関心と期待が高まっています。“風”という自然エネルギーが利用できることは、化石燃料を海外からの輸入に頼っている日本にとっては魅力あるものであり、地球温暖化の原因となっている二酸化炭素を排出しないという大きな利点もあります。一方で、鳥が風車に衝突するバードストライク、周辺環境や景観の改変などの環境問題が発生していることは、あまり知られていません。

最近になってようやく関心が高まってきたのは、風車へのバードストライクです。高速で回転する風車のプロペラに、大小様々な鳥が衝突するのです。風車は、良い風の吹く場所に建てられます。良い風の吹く場所は、長距離の移動をする渡り鳥の移動ルートとなっていることが多く、猛禽類などはハンティングの際にも風を利用します。従って、風車の設置場所は鳥類の移動ルートや餌場とかち合うこととなるため、バードストライクの発生が危惧されるのです。道内では、すでに260基以上の風車が建設されており、オジロワシ、トビ、オオセグロカモメなど数種類の鳥類でバードストライクが確認されています。オジロワシの事故例は、2002年以来毎年発生しており、これまでに6羽が犠牲になっています。一見ゆっくりと回転しているように見える風車ですが、一片の長さが40mにもなるプロペラの先端部の回転速度は時速200キロを超えます。これまでに被害に遭ったオジロワシなどの死骸は、翼や胴体が切断された状態で発見されており、その破壊力は凄まじいものであることがうかがえます。

現在、風力発電の建設にはアセスメントが義務付けされていません。自主的に環境調査を実施している業者はあるものの、調査の手法や評価基準が確立されていないため、十分な評価はされていないのが現状です。今後は、洋上風車の建設が増加する可能性もあり、風力発電による環境問題は、さらに深刻化することが予想されます。日本列島は、渡り鳥の主要な移動ルートなのですから、ゾーニングに必要な詳しい渡りルートを解明し、法を整備することなども急務だと思います。

二酸化炭素の排出量を減らすことは、世界中での大きな課題です。ですから、風や太陽光などの再生可能なエネルギーの活用は否定するものではありません。ですが、これらは、二酸化炭素の排出量を増加させないことはできても、排出され続ける二酸化炭素を減らすことはできないのです。二酸化炭素を排出している根源を絶つ努力をしないかぎり、風力発電の普及による効果は少ないのです。

風力発電をエコロジーなエネルギーと称するならば、環境問題には細心の注意を払い、影響を最小限にとどめる努力を怠ってはならないと思うのです。



(根室市在住)

バードストライクに遭ったオジロワシの若鳥 (2003年12月10日 根室市昆布盛)

豊平川では河畔林や河道林をほぼ3年に一度、伐開、間引きしている。必要以上の除去は問題だが、現在の河川空間では仕方がない面もある。逆に、このような攪乱がないと生息地が消失してしまう生物もいる。砂礫環境を好むコチドリ、イカルチドリ、インシギなどの生息地は森林化で失われるのだ。草原も減少するので草原性鳥類の生息も難しくなる。間引きによって維持されるハビタットもあるのだ。ある意味、河畔林伐採は攪乱の役割を果たしている。

しかし、人工的な手入れは自然が作り出す多様な環境とは程遠い。川が自由に遊んで流れれば、たまの大水で植生が洗い流され多様なハビタットが常に維持される。

現時点で河川空間を広げるのは困難だ。次善の策は、河畔植生を河川の断面の一部に組み入れた形で河川空間を見直すことだ。豊平川でもこれが一番の課題。しかし、高水敷の多くは札幌市が占用権を持っており、公園以外の利用に目が向かない。逆に、河畔にもっとパークゴルフ場を作れという声もまだ多い。

対症療法ではあるが、河畔林伐採や間引きの手法を工夫することで現状での最善策を探ることは重要である。川ごとに地理的条件などが大きく異なるので河畔林間引きの必要性や方法は川ごとに異なる。個々の川について、川を見ている市民が行政と対話し、意見や提案を交換していくことが重要であろう。

河畔林の間引きは、所詮、対症療法でしかない。河川空間の拡張を含めた都市計画の練直しが急務である。温暖化に伴う気候変動と予想される災害の増加への対応としても重要なのではないだろうか。

(札幌市在住)

# 北海道 各地の

## 汐首岬の風力発電

林 吉彦  
(専門委員)

06年12月2日札幌時計台会議室において第1回の「函館汐首岬風力発電事業に関わる鳥類への影響評価委員会」が開かれた。この委員会は、野鳥の会道南松山支部と事業者・KKユーラスエナジー・ジャパンとの話し合いの中で開催趣旨も含めて設置が決まっていた。

開催趣旨は当初ユーラスが出してきた建設を前提とした「…環境負荷を低減できる方向性を模索すべく…」という文言を道南松山支部の意見で削除し、「本事業の可否について専門家の意見を得る」となった。委員は7名で構成され、委員長に上田恵介(立教大学理学部)氏を選出し討議に入った。道南松山支部は、詳細な調査データを示し、建設予定地は、本州と北海道を結ぶ渡り鳥の主要ルートになっていること、レッドデータブックに記載されているオジロワシ、オオタカをはじめ多くの種が利用していること、全国的に極めて数の少ないハヤブサの子育ての場所になっていること、函館市民の貴重な探鳥地であることなどから風車建設には相応しくないと主張した。一部委員からは、風車を建てればバードストライクは起きるが、それがダメだというなら、高圧線やビル、自動車に当たって死ぬのはどうするかといった小泉流の論理のすり替えて建設を容認しようとする発言がなされた。日本の風力の2割以上のシェアを持ち、欧州やアメリカ、韓国、中国にまでシェアを持つ大手企業に、100人にも満たない会員数の弱小支部が懸命に立ち向かっている現状に多くの支援が望まれる。

(七飯町在住)

# 「音楽劇から自然をみつめなおそう」

佐藤 雅彦  
(会 員)

『みつめなおそう、ふるさとの明日、何が大切なのかを！』

これは昨年11月に豊富町で開催された音楽劇『森への道』(全12曲、作曲は木村雅信さん)の終盤近くに叫ばれるセリフのひとつです。本作では、夜の森に現れるヒメネズミやコテングコウモリ、そしてエゾフクロウたちが主人公。彼らは豊かな森で生き生きと暮らしていましたが、ある日、別の森のフクロウからの手紙で自分たちの森が道路建設のために切り倒されることを知らされるのです。

この音楽劇を演ずる「水の詩合唱団」(石川敏代表)は平成10年に町民の手で結成され、これまでに3回の地元公演を行い、今回で4回目。合唱団は小さな子どもから大人までの約30名で構成されています。いわゆるママさんコーラスとは異なり、音楽劇に関連した自然体験・観察会などを交えながら、親子の絆をはぐくみ、1年以上もかけて練習を積み重ねていくことがこの合唱団の大きな特徴です。活動の中心となる音楽劇は、札幌在住の関山昭子さんが道内各地をまわって取材し、自然の素晴らしさ、大切さを脚本化、作詞・演出・指導まで行い作り上げてきたものばかり。関山さんは札幌で毎年、様々な自然からのメッセージを込めた音楽劇を公演し続けているのです。

なにかが起きてからの対応のみが注目されがちな昨今の諸問題。土にしみ込む春の雨のごとく、人の心にそっとしみ込んでいくこのようなアプローチの大切さを再認識させられた豊富な公演でした。

(利尻町在住)

道  
ニュース

## 野付のタンチョウ

森田 正治  
(理 事)

道東/中標津の町外れにある中標津保養所温泉旅館の池は、温泉を流しているの  
で冬でも凍らず、水鳥たちがのんびり。この池に12月4日、3羽の親子のタンチョ  
ウが飛来。実は、23年前にも子供が傷付き阿寒・鶴居に戻れないツルの親子がやってきた。

以来、毎冬、このツル夫婦が冬を過すようになり、給餌人の佐藤さんは「孫ができた」と大喜び。

この夫婦は、夏の間は野付半島の基部で生活していると言われていたが、同日に姿を消したと、幼  
い子連れと言う事実で同じ個体とほぼ証明された。一度目の営巣で失敗し、2度目で子育てしていたが、  
10月1日から鴨猟の解禁。実はこの地域は野鳥が多いものの、ラムサール登録湿地の「野付半島・野付  
湾」から外された可猟区で、まだ飛べない有様だった。地元役場、支庁や猟友会に狩猟の自粛をお願い  
し、看板を横目に心無いハンターもいたが無事に育った。こ  
このツルたちに餌をやり見守っていたのが、「民宿のつけ」の  
ご夫婦。



保養所温泉旅館で餌を食べるタンチョウの親子

野付半島の先端部と基部は、野鳥が多く天然記念物のタン  
チョウやオジロワシも営巣しているが、猟友会の反対で鳥獣  
保護区から外された。昨春、この湾に注ぐ河川の上流でオオ  
ハクチョウ2羽が鉛中毒死している。先ずは、鉛散弾の使用  
禁止、そして全面的に鳥獣保護区としラムサール湿地の拡大  
を望んでいる。安心して野鳥が暮らせる為にも。

(中標津町在住)

## サンルダム問題は玉虫色報告・闘いは第二ラウンドへ —天塩川流域委員会終了の報告—

副会長 佐々木 克之

12月25日に士別で第20回流域委員会が開催された。前回の委員長まとめ案以後、委員と委員長・副委員長とのやりとりがあり、それを受けてまとめ修正案が提示され、これについて論議された。

**治水問題**…以下の抜粋のように両論併記となった。「サンルダムは治水対策としてすぐれているという意見が多数であった。しかし、サクラマス問題などで懸念があり、遊水地や堤防補強による治水対策が望ましいとの意見もあった。…現在の計画高水位よりも高い水位で洪水を流すことは、堤防への負荷を高め、破堤時の被害を大きくし、…行うべきでないという意見が多く出された。一方、名寄川における堤防の現状によれば、現在の計画高水位以上で目標とする洪水を流せられるのではないかとこの意見もあった」（会報NC131号または協会HP会報131号「サンルダム問題の近況—まず治水問題が争点—」（佐々木克之）に詳しい計画高水位等の数字を示して説明）

**サクラマス問題**…予想に反して両論併記ではなかった。1) サンルダムを建設する場合に、対策の実施にあたっては専門家の意見を聴く。2) 現状の遡上、降下など河川環境に負荷を与えず、必要に応じて試験を行い、その対策の効果を確認しながら、サクラマスの生息環境の推移を継続的にモニタリングし、3) その結果に基づきながら必要な対策を講ずることができる体制を整備する。1) はサンルダム建設を前提にして対策を講じる場合の留意点で、ダム建設が前提となる。2) は、あいまいである。「必要に応じて」を「事前に」とすべきという前川委員の意見に対して「順応的管理をして」がよいという意見がでて、委員長がまとめると発言して終了した。順応的管理の中身を明らかにしなかったので問題が残る。3) はサンルダムを建設しながら対策を講じるのか、事前に対策を講じるのか不明のなかで、対策に関しては別途委員会か何かを設置することを明らかにした。

**チェック体制**…「河川整備計画の実効性を高めるために、計画の達成状況等に関してチェックをするシステムを作るべきである」に関して、前川委員から「前川：サクラマスについては、産卵床の数についての調査結果、淡水魚フォーラムからの意見書もある、それらについての検討は、このシステムのなかに入っているのか。」という質問に対して、委員長から「入っている」と回答、さらに出羽委員から「積み残しの議論は？」と聞いたのに対して、委員長は「これがその積み」と回答した。

私たちが最小限要求として、委員長提案のまとめに入れるべきと述べた意見書の中の3点ほどは取り入れられていて、少しは運動の成果が見られた。しかし、肝心なことは上記のように玉虫色で決着した。そのためか、マスコミでは「サンルダムゴー」という見出しや、「議論は続く」としたものなどそれぞれに異なった。

委員会終了後の記者会見で私たちが述べたのは、1) 議論が尽くされていないのに終了したことへの抗議、2) 名寄川の治水では流域住民の声が反映されていないので、さらに検討すること、およびサクラマス問題に関する開発局の調査や考えは問題が多すぎて、検討組織を立ち上げるべきである、3) 今後は開発局交渉をして、問題点を明らかにしていく、の3点であった。第二ラウンドは、流域委員会意見を受けて出される「河川整備計画案」との闘いであるが、私たちの闘いによって、流域委員会の意見内容にそれなりの今後の闘いの足場を作ったということは評価できると思う。

## 「06年支笏湖三話」

理事 中 川 晃

07年は暖冬の内に明けました。支笏湖外輪の山々も降雪が少なく、例年であれば純白に輝く山並みも、本来の美しさにはもう少し待たねばなりません。

さて、今回は私が活動の拠点としている支笏湖とその周辺で昨年、体験したり見聞きした事柄を報告させていただきます。

06年、支笏湖の春は「静かな湖畔」と共に訪れました。ここ数年来、支笏湖では水上バイクやプレジャーボートによる騒音に悩まされてきました。昨年の春、湖畔住民や市民、関係者の永年の願いがやっと叶い、支笏湖への動力船乗り入れが原則禁止となりました。

ポロピナイ地区などは、日に100隻を越える水上バイクやその愛好家らの車両とテントに占拠され、近づくのが憚れる状態でした。心無い利用者によるゴミの不法廃棄は後を絶たず、水上バイクから流れ出る油による水質汚染、ジェット水流が原因と見られるチトセバイクモの消滅など、暗い話題が続いただけに本当にうれしい出来事でした。夏には水遊びに興じる親子連れが見られるようになり、本来の美しい支笏湖畔の姿を取り戻す事が出来ました。



支笏湖では、04年の台風18号により、約7000haにも及ぶ風倒木被害が発生しました。

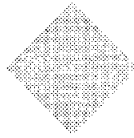
昨年9月、この地に約1800人の市民が参加して植林活動が行われました。今回の事業は、「支笏湖周辺台風被害・復興の森づくり実行委員会」の呼びかけによるものです。今後2年間で、100haに「アカエゾマツ」を中心に約10万本の植林を行う予定です。

今回の植林では実験的な取り組みとして、以下の3点が取り組まれました。①1ha当たりの植林本数を通常の30%、1000本に抑える、②植林面積と同面積を自然再生にゆだねる。③植林した個人、団体は「森の里親制度」に登録し、今後も下草刈り等継続的な活動を行う。

今まで多くの植林地が、単一樹種を植林しその後、手入れが行われずに荒れ果てている姿を多く見て来ました。今回の植林は、多様な樹種の森づくりを市民が行い、管理、育成することに大変に意義があるように思われました。

10月のはじめ「樽前山の登山道を無断で拡幅したものが居るらしい」との情報があり、犯人は当局の事情聴取に対して「歩きにくかったので、歩き易くした。登山道の管理が悪い」と言っているらしいという、衝撃的なニュースが飛び込んで来ました。近年、中高年の登山ブームと共に山でのモラルが問われて久しいと思いますが、今回の「犯人」の主張の幼稚さと、ことの重大性を考える時、「社会教育の場としての国立公園のあり方」が深く問われているように思われます。 (千歳市在住)





## 沙流川の河川生態系とサケの無念さを思う

常務理事 奥谷浩一

昨年は平取町を三度も訪れる機会があった。そのたびに、閑静な二風谷には似つかわしくない二風谷ダムと沙流川の本支流を見るにつけて、河川の生態系の破壊の有様を実見し、河川に人工構造物があるという問題の深刻さを痛感した。

かつて清流で知られた沙流川は、地元のアイヌ民族の反対を押し切って建設された二風谷ダムのために、今や泥川と化している。本流の河岸はたえず浸食されて崩壊を続け、兩岸の樹木はほとんど流失しかけており、河床低下も進んでいる。ダムには大量の土砂が堆積し、ダムの兩岸と本流が水の滞留地帯に流れ込む所でとくに激しい。後者の土砂はトラック数十台を使って除去しても追いつかないという。支流のオサツナイ川が本流に流れ込む所でも大量に泥が堆積していた。直前に襲った台風の爪跡はいたるところに残されていた。沙流川上流の岩知志ダムでは、泥を除去するための浚渫船が流され、ダムの堤体に引っかかっていた。仁世宇でも河岸の浸食と崩壊が顕著であり、河岸に貼られたコンクリートがはがれかけている光景も随所で観察された。下流の富川地区は、排水ポンプがないために、またもや洪水の被害を受けていた。これらは自然の猛威と、河川の自然環境を破壊して人工物でいじくり回したことが、相乗作用を起こした結果と見るべきであろう。

最も衝撃だったのは二風谷ダムの下流の光景であった。ダムの下流部の、シカルベ川が本流に注ぎ込むあたりに、サケの死体が累々と横たわっていたのである。これらはホッチャレではない。ダムの三段つづら折で50いくつもの階段があるあの魚道を探せなかったか、またはこれを避けたサケが、下流部で産卵に適した場所を探すうちに力尽きたのである。その証拠に、メスの腹部を押すと、真っ赤なイクラが飛び出してきた（表紙写真を参照）。

あの魚道を遡ったサケは少しはいるかも知れないが、このような構造物を避けるのが普通であろう。彼らは河床が柔らかく酸素を沢山含んだ湧水のある場所でしか産卵しないのである。このことは、現在の魚道が川と魚の生態学に反し、人間の自分勝手な考えによって作られたものでしかないことを示している。魚道を作るにしても、魚の身になって、彼らと河川の生態系に一致した環境条件をそなえた魚道を作るべきではないか。不自然な構造物のために子孫を残すという生涯最大の大役を果たすことができずに死んだ彼らの無念さを思いやるべきであろう。彼らの死体は、無言のうちに、自然の摂理を忘れた人間の浅知恵、傲慢さをわれわれに訴えているように思えてならなかった。

（江別市在住）



### 「変わりつつある生き物の関係」 2007年自然保護学校開催のご案内

2007年自然保護学校を下記の日程で行います。

今年は「変わりつつある生き物の関係」としてそれぞれの専門家にお話をさせていただきます。自然保護学校の講義は、私たちを取り巻く環境をよりよい状態に保つために、自然を良く知り、自然が大切であることを理解していただける内容で取り組んでおります。

広く市民の方々に理解していただくよう、スライド、OHP、パソコンプロジェクターなどを使用し、分かりやすい内容に努めますのでぜひご参加ください。

主 催：(社)北海道自然保護協会 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル 6F

場 所：札幌学院大学社会連携センター TEL 011-280-1581

(札幌市中央区大通西6丁目 地下鉄大通り駅出口1番徒歩1分)

日程・講師 各日18:00～20:00

2月6日(火)開校式・「北海道の河川と淡水魚」 梶山 雅秀(北大大学院水産科学研究院教授)

2月13日(火)「セイヨウオオマルハナバチの北海道への侵入と在来生物への影響」 永光 輝義  
(森林総合研究所・北海道支所研究主任)

2月20日(火)「北海道のアオサギの生息状況とその変遷」 松長 克利(北海道アオサギ研究会代表)

2月27日(火)「アライグマ防衛ー現状と今後の課題ー」 池田 透(北大大学院文学研究科助教)

3月6日(火)「スズメの大量死を振り返って」 黒沢 令子(スズメネットワーク事務局)・開校式

\*2月6日は受付、開校式がありますので早めにお集まりください。

\*諸事情で講師の順序が変わる事がありますのであらかじめご了承ください。

定 員：60名 参加費：3,500円、協会会員・学生3,000円(開校日に徴収)

問合せ・申込み：北海道自然保護協会 TEL・FAX 011-251-5465 Eメール info@hokkaido.or.jp

132号から4回に渡って在田常務理事にコラムを書いていただきます。

在田一則さんのプロフィール

札幌市出身、当協会常務理事、現在北海道大学総合博物館研究員

地質学の専門家であり、06年11～12月もネパールに調査に行ってきました。博物館には在田さんの採取された岩石標本が多数展示されています。

#### コラム

その1

### ジオダイバーシティ (geodiversity)

在田 一則

バイオダイバーシティ(生物多様性: biological diversity/biodiversity)に対応してジオダイバーシティ(geodiversity)という用語がある。1970年代から使われている biological diversityは1992年のリオ地球サミットで調印された「国連生物多様性条約」以後は社会的にも認知され、今では日常的にも使用されている。しかし、ジオダイバーシティはまだなじみがないようである。訳語も地質多様性、地学的多様性、地圏多様性などまだ定着していないようなので、ここではカタカナ書きとする。

ジオダイバーシティの標題をもつ教科書(Geodiversity valuing and conserving abiotic nature, John Wiley & Sons, 2004)を表したM. Gray氏は、“ジオダイバーシティ”を「地質学的(岩石・鉱物・化石)、地形学的(地表形態・形成過程)および土壌の特徴の自然における多様性と定義し、生物多様性の非生物的同意語であるとしている。このように、ジオダイバーシティは、自然の評価・保存には、生物自然界の多様性(生物多様性)だけではなく、非生物自然界の多様性(ジオダイバーシティ)の認識も重要であり、両者を総合的に捉えないと自然の多様性を理解できないという考えから生まれた地球・環境科学における新たな概念である。しかし、地球表層部の自然は地圏・大気圏・水圏そして生物圏の共存と相互作用により成り立っているのであるから、atmodiversityやhydrodiversityを考慮する必要もある。

**\* お知らせコーナー \***

**新 会 員 紹 介**

2006年7月～11月

- 【A会員】** 乳井 幸教、田村 義彦、阿部 孝夫、舟木 上総、中根 恵美子、向井 徹、尾田 孝人、野呂 義彦、藤井 勉、横井 真順、小野 昌亮、小野 三郎、横屋 真一、小野 亮一、山口 豊、矢吹 全、福岡 淳一、石山 由夫、八木 橋 諭、北山 吉勝、長尾 芳文、高橋 直宏、福田 茂夫、間所 公男、横山 明光、梅津 征一、元、渡部 浩一、奈良 泰世、安間 芳史、脇阪 昌義、吉原 正和、桑原 修、岩佐 一輝、八木 正久、大西 邑子、石山 順子、森田 和代、藤田 叶子、富永 まゆみ、東 道子、船戸 恵、富塚 陽子、河合 (株)サンキキ 淑美
- 【団体会員】** (株)サンキキ
- 【学生会員】** 平 尚恵、桐原 崇、福田 真也、小林 尚史、及川 克彦、小泉 芳王、眞野 優平、杉山 妃奈、久保田 さちえ

**寄 付 金**

ありがとうございます。

- 梅沢 俊 20,000円  
前田 正子 (ブーケドソレイユ) 20,000円

**活 動 日 誌**

2006年11月

- 2日 第18回天塩川流域委員会傍聴  
6日 緑資源機構談合疑惑にからむ声明文一道政記者クラブで会見  
14日 第5回拡大常務理事会  
19日 セミナー「地球(ガイア)を考える一日 高山脈を国立公園にー」にて講演  
25日 「サハリン2ー開発現地からの最新レポート」北海道ラプターリサーチ主催出席

2006年12月

- 4日 第19回天塩川流域委員会傍聴  
7日 国有林伐採問題に関する北海道森林管理局との交渉  
9日 第3回理事会  
25日 第20回天塩川流域委員会傍聴  
27日 第4回北海道開発事業審議委員会(北見道路再評価)傍聴

**要 望 書 など**

- 11月6日 林野庁、緑資源機構等、関係5機関に送付…緑資源幹線林道の即時中止と「緑資源機構」の廃止を求める声明  
※大規模林道問題北海道ネットワーク5団体連名で提出

- 11月15日 北海道開発局長宛  
北海道開発局事業審議委員会の公開についての要望書  
※「北見の自然風土を考える」市民連絡会と連名
- 11月17日 (株)ユーラスエナジージャパン宛  
(仮称)根室ウインドファーム計画策定に関わる要望書
- 11月27日 天塩川流域委員会事務局宛  
19回天塩川流域委員会への申し入れ書&清水康行委員長への意見書  
※14団体連名
- 12月11日 天塩川流域委員会事務局宛  
第20回天塩川流域委員会への意見書&清水康行委員長への要望書  
※14団体連名

**総会日時のお知らせ**

2007年度の定期総会の日時が決まりましたので出席予定としてご都合いただけますようお願いいたします。

日 時：2007年5月26日(土) 13:00から  
総会終了後、15:30より17:00まで講演会を予定

場 所：北大学術交流会館 会議室  
(札幌市北区北8条西5丁目)

**編 集 後 記**

明けましておめでとうございます。今年の暖冬・小雪は自然の植生などにとっても非常に気掛かりなところ。北海道は、04年の台風被害を始めとしてその後毎年大きな自然災害が発生しています。地球温暖化の影響でしょうか？是非、今年は災害の無い穏やかな年であって欲しいものです。

今年も会員の皆さんからの投稿をお待ちしています。(編集委員 荻田 雄輔)

**会費納入のお願い**

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、未納の方は至急納入下さいませようお願いいたします。

- 個人A会員 4,000円  
個人B会員 2,000円  
(A会員と同一世帯の会員)  
学生会員 2,000円  
団体会員 1口 15,000円

- 〈納入口座〉  
郵便振替口座 02710-7-4055  
北洋銀行大通支店(普通) 0017259  
北海道銀行本店(普通) 0101444  
札幌銀行本店(普通) 418891

〈口座名〉  
社団法人 北海道自然保護協会

※ この紙は再生紙を使用しています。

